法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

【書評】木村博編『フィヒテ―『全知識学の基礎』と政治的なもの―』創風社　二〇一〇年　木村博編『フィヒテ―『全知識学の基礎』と政治的なもの―』を読む

清水, 満 / Shimizu, Mitsuru

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
71
(終了ページ / End Page)
74
(発行年 / Year)
2011-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007955

Hosei University Repository

【書評】
木村博編『フィヒテ――『全知識学の基礎』と政治的なもの――』創風社　二〇一〇年

木村博編『フィヒテ――『全知識学の基礎』と政治的なもの――』を読む

清水　満

哲学初学者が最初に手にするのは入門書である。その段階を過ぎると、現在の研究のレベルがわかり、研究の方向、文献案内などがついた『～読本』『～を学ぶ』といった論集が欲しくなる。これは研究者にとっても便利なものである。カントやヘーゲルには『カント読本』（法政大学出版局）『ヘーゲル読本』（同）『続・ヘーゲル読本』（同）『ヘーゲルを学ぶ人のために』（世界思想社）があり、シェリングですら『シェリング読本』（法政大学出版局）がある。

しかし、フィヒテについては、入門書に福吉勝男氏の『人と思想シリーズ　フィヒテ』（清水書院）があるだけで、次段階の『フィヒテ読本』にあたるような良質の書物がまったくなかった。これでは、フィヒテ思想に関心をもつ人も育たず、あいかわらずカントとヘーゲルの間に埋没したマイナーな思想家として扱われるのもやむなしという状況だった。

そこに颯爽とあらわれたのが、この『フィヒテ――『全知識学の基礎』と政治的なもの――』である。たしかにフィヒテの『全知識学の基礎』を中心とした論考であり、それに政治思想的な内容がからむという内容で、全方面に渡っての議論がなされているわけではない。しかし、カント、ヘーゲル、あるいはフッサール、レヴィナスなどをからめた思想史的考察もあり、鼎談やインタビューでは、フィヒテ哲学全体にわたる興味深い議論が平易な形で紹介されている。しかも邦文文献案内と年譜がきわめて便利で、この書の価値をさらに高めている。これこそフィヒテ研究に欠けていた『フィヒテ読本』に相当するものではないだろうか。

Hosei University Repository

筆者は日本フィヒテ協会の一会員ではあっても、生業は別の一介の市民にすぎない。なのに、編者の木村博氏から、直々に書評を依頼された。人選ミスではないかと思うが、フィヒテ研究では、尊敬すべき先輩である木村氏に頼まれれば、さすがに嫌とはいえない。ここで論じられている豊かな内容をフォローする十分な知識と能力がないという問題はあれど、一読者による素朴な疑問、感想なら書けそうだという思いで引き受けた。

もともとこの論集は、木村氏が一橋大で行っていた『全知識学の基礎』の自主ゼミが契機ということだ。それゆえ、対象テキストは『全知識学の基礎』ではあるが、内容はそれだけにはとどまらない。具体的には、第一部第一章と第二章が『全知識学の基礎』のテキストに即した論文で、第三章が「フィヒテとカントの接点としての平和論」という視点から、フィヒテとカントの対立と継承が扱われ、第四章は、相互承認論の検討でフィヒテとヘーゲルがカバーされる。第五章では「自然状態における闘争」というテーマからフィヒテとレヴィナス、フッサールを扱い、現代思想までも射程に入れ、第六章はドイツユダヤ人のフィヒテ思想の受容、第七章はフィヒテの政治思想の日本での受容という知識社会学的、歴史的な考察がなされている。いずれも現代の研究レベルの高い水準に立ち、現在の到達点を知ることができる。

第二部は「フィヒテ哲学の諸相」と題されて、Ⅰがわが国を代表するフィヒテ学者の入江幸男氏、岡田勝明氏と編者の木村氏との鼎談「フィヒテのアクチュアリティ」。Ⅱは「ホフマン教授に、フィヒテにおける自然および言語の問題を問う」という木村氏によるインタビューである。ほかにそれぞれ二〜三頁程度の読みやすい五つのコラム（「初期フィヒテと啓蒙思想」「自我と抵抗――ビランとフィヒテ」「フッサールとフィヒテ」「フィヒテとベンヤミン」「フィヒテと江渡狄嶺――像と場」）と巻末に資料として「日本語で読めるフィヒテ文献」と「フィヒテ年譜」が収められ、バラエティに富み、非常に豊かな内容となっている。

これらすべてについて論評するには字数が圧倒的に不足しているので、とりあえず私がフォローできた第一章と第三章について主に論じてみる。

第一部第一章の木村博氏による「第一根本命題と立言判断」は、『全知識学の基礎』の有名な箇所を改めて独自の観点から捉えなおしたものである。フィヒテの哲学で一番知られた箇所だが、ある意味あまりに人口に膾炙しすぎて、かえって採り上げられることが少なくなった。最近ではむしろイエナ期なら、『新方法による知識学』が、完成度、叙述の平明さと内容の豊かさで人気がある。『全知識学の基礎』は、卑俗な比喩を使えば「昔の名前で出ています」

Hosei University Repository

あるいは「地方都市のシャッター通り」的な扱いだった。しかし、木村氏は、この根本命題論に新しい光を当てて「郊外の大型ショッピングモール」（？）に負けない輝きを引きだしている。氏は、まず、第一根本命題である立言判断こそが単独の絶対性をもち、反立命題と総合命題である第二第三根本命題がそれぞれ対立するものとみなす。そして、『プラトナー講義』にある「根源的分割」を用いて、この命題が表現する絶対性は自らをそのように分割し、破ることにおいて、絶対的同一性を無限の課題としてあらわすと考える。そして、この把握がその後の知識学の映像論、図式論として展開されたとみなすのが、この論文の独自性であり、優れたところである。

私は、むしろカントに戻り、限局の働き、有限性のもつ豊かさを示す第三根本命題に着目し、構想力の遊動や「交替限定」にもとづく人間学的解釈をしてきたが、それとは正反対の方向をもつこの解釈はたいへん刺激的であった。木村氏もいうとおり、『全知識学の基礎』は「実践理性の優位」が基本思想である。第三部の実践我における絶対的反省、自己内還帰などを、木村氏がどのように解釈するか。次はそれを期待してみたい。

第三章は新川信洋氏による「『永遠平和論論評』と知識学――カントとフィヒテの接点としての平和論――」となっている。冷戦の崩壊以後、カントの『永遠平和論』は注目のテキストとなり、カント研究者、政治哲学者たちのあいだでブームといえるほどに論じられてきた。その影響がフィヒテにも及んで、近年では、カントとフィヒテの国際関係論がちらほらと扱われるようになった。その際、フィヒテの論拠は『自然法の基礎』の「国際法ならびに世界市民法綱要」が使われることが多かったが、新川氏は『永遠平和論論評』に注目し、そこにフィヒテの世界共和国構想を見て、カントとの共通点と相違点を明らかにしている。しかも、カントとの一番の違いが、知識学にもとづく「確実性」の捉え方とするのが、この論文の特徴である。

新川氏は、『永遠平和論論評』にあらわれたフィヒテの世界共和国構想を評価して、『自然法の基礎』でそれが後退したことを重視せず、フィヒテ自身は「『永遠平和論論評』でのスタンスを踏襲している」（一〇五頁）としている。私は、むしろフィヒテの現実的な国際関係理解の反映であり、後期の国家論や国民論、いくつかの戦争論を見れば、フィヒテの世界共和国構想は若き頃の一エピソードにすぎないのではないかと考える。あと、知識学にもとづく「確実性」の議論は、この書物のフレームが『全知識学の基礎』であるせいか、無理矢理それに関連づけたという印象を受けた。政治哲学だけの範囲でも十分に豊かな内容をもつ優れた論文だけに、ここは割愛した方が、議論がすっきりしたのではないかと思った。

Hosei University Repository

第二章は、大河内泰樹氏の「理論知の限界――『全知識学の基礎』における観念論と実在論の相克――」で、『全知識学の基礎』で一番難解で、誰もが躓く部分の明快なコメンタールとして、大いに役立つものである。第四章は「相互承認論の原理と射程――フィヒテとヘーゲルの承認論――」と題された片山善博氏の力作である。フィヒテとヘーゲルの相互承認論を個別に詳しく検討し、関心ある者には有益な内容になっている。ないものねだりの希望をいえば、片山氏も言及している岡本裕一朗氏の「フィヒテの承認論がヘーゲルに影響を与えたという言説は神話にすぎない」という立場に、いかに反論可能か、までを書いていただくと、より興味深いものになったと思われる。

第六章の船津真氏による「ドイツユダヤ人による受容から見るフィヒテ政治思想」、第七章の栩木憲一郎氏の「フィヒテ政治思想の日本受容」はともに、フィヒテの政治思想の影響作用史を歴史的に考察したもので、フィヒテの政治思想解釈につきまとう排外的ナショナリズムや反ユダヤ主義の問題を考える上で、大きな貢献をする優れた論文であるが、残念ながら詳論する余裕がない。フィヒテの思想を現代の政治哲学的問題と関連させる場合には、必読の文献になることはたしかだとだけいっておこう。

人文系の学問では、書斎や研究室でテキストを読み、一人で考えて執筆するというスタイルが長く続いた。しかし、現代ではもはやそのような学者は時代遅れになっているようだ。資料や文献が膨大になり、専門化の度合いが激しくなった今、むしろチームを結成して、さまざまな領域を横断し、情報を整理して、プロデュースしていく能力が問われているといえるだろう。

この論集を読むにつけ、論文、鼎談、コラムなどの多様な内容を企画立案し、バランスよく配置した木村氏のプロデュース力に感嘆する。それだけではなく、参加メンバーが自主的にわきあいあいと議論をして、創造的なものを生み出していく姿に羨望をさえ覚える。「あとがき」によれば、木村氏がまだ非常勤講師時代に始まった企画であり、権威や地位をちらつかせての結集ではない。このように、思想に興味をもった者が自主的に集まり、闊達に意見を交わし、相互に「承認」して、相互に「促し」あいながら、「相互作用」によって思想を形成するというのは、実はフィヒテの生涯を通じての学びの確信であった。期せずして、この論集そのものが、フィヒテの思想を生きた形で体現するものになっている。